

の重篤な合併症を併発した。

10 最近5年間に当院で経験した大腸穿孔性腹膜炎36例の検討

辰田久美子・河内 保之・牧野 成人
西村 淳・小川 洋・滝沢 一泰
加納 陽介・池崎 寛子・新国 恵也
長岡中央総合病院外科

2003年1月から2007年12月までの5年間に当院で経験した36例の大腸穿孔性腹膜炎について検討した。男性23例、女性13例で、平均年齢は70.3歳で70歳以上の高齢者が6割以上を占めていた。穿孔原因は大腸癌が最も多く12例(32%)であり、次いで憩室炎10例(28%)であった。穿孔部位はS状結腸が17例(47%)で最も多かった。術後合併症としては創感染が最も多く、14例39%の症例に認められた。在院死亡は5例(14%)であった。その原因は、肺炎、MOF、肝不全、ARDSであった。今回の検討で、腹膜炎の術前・術中には癌が指摘されず、術後に大腸癌の存在が明らかになった症例が3例あった。これらの症例について検討、考察を加えた。

11 当院における大腸穿孔性腹膜炎

岡田 貴幸・佐藤 友威・鈴木 晋
青野 高志・武藤 一郎・長谷川正樹
県立中央病院外科

2003年から2007年までに大腸穿孔により腹膜炎

をきたし当院で手術を行った23例について臨床病理学的に検討した。穿孔は肉眼的か病理学的に証明されたものとした。発症年齢は32～92歳で平均74.8歳であり、男女比は11:12だった。原因疾患は、大腸癌と憩室炎が7例(30%)で、特発性・医原性・外傷が各々3例(13%)であった。医原性は2例がCFによるもので、1例がRFAによるものであった。穿孔部位は左側が20例(87%)で残り3例が右側であった。術式はハルトマン手術が13例(56%)、大腸切除が6例(26%)、穿孔部縫合閉鎖が3例(13%)、人工肛門のみが1例(4%)で、60%が二期手術であった。在院死は4例(17%)に認められた。1例は外傷によるもので来院時出血により心肺停止状態であり出血と考えられ、もう1例は退院間近の突然死で誤嚥が原因と思われた。大腸穿孔による直接死亡は2例であったが、予後因子について検討した。

II. 特別講演

日本DMAT, 活動の現状と問題点

— 中越沖地震における活動を中心に —

村上総合病院外科 部長

林 達彦